



作家・ドイツ在住 川口マーン恵美

矛盾が根深いドイツ人

昨年、上梓した山口昌子さんとの共著『原子力はいらる？ いららない？』（ワニブックス）が、このたびエネルギーフォーラム社の第46回「エネルギーフォーラム賞」の優秀賞をいただいた。



山口さんは元産経新聞のベテラン記者で、長らくパリ特派員(のちには支局長)を務め、ミッテラン、シラク、サルコジ、オランド、マクロンと、歴代5人の大統領と時を共にした。その広い見聞を2023年に、『パリ日記 特派員が見た現代史記録 1990-2021』として5巻組で上梓。昨年は、膨大な記事や著書を通じて日仏の相互理解を促進した功績が、日本政府から表彰されている。いずれにせよ、フランス政治については間違いなく普通のフランス人より詳しい。現在もパリ在住。

フランスとドイツはお隣同士でありながら、多くの点で異なっている。特にエネルギーについては、フランスが原発で電力需要の7~8割を賄う原発大国であるのに対して、ドイツは2023年4月で脱原発。それ以降、ドイツは大々的にフランスの原発電気に依存しているが、そういう矛盾はすっかり無視できるところがドイツ人のすごいところだ。

ドイツ人の矛盾は根が深い。まず、CO₂削減という脱炭素政策を掲げていながら、CO₂フ

各国の原子力発電比率
(2024年における発電量に占める原子力の割合)



出所：ウィキペディア (Wikipedia)「原子力発電」 <https://00m.in/bciZx>
国際原子力機関 (IAEA) <https://00m.in/VtLTB>

リーの原発をやめてしまった。また、再エネだけでは産業国の電力需要が賄えないことは百も承知なのに、再エネ100%を目指している。

さらには、太陽や風のない時の穴埋めに石炭やガスといった化石燃料で発電しているためCO₂が減らないが、それをガソリン車の排気ガスのせいにしている。しかも、ガソリン車を駆逐するため、電気自動車をCO₂フリーだとして奨励し、その電気を作っているのは化石燃料だということを無視する。そして、太陽光パネルを敷き詰め、風車を立てるために森林を伐採しても、それが環境に役立つと主張している。

“怖くて水も飲めない東京”

ドイツは元々「緑の党」が思想的に強く、学校教育は反原発で、国民の多くも反原発。発電は殊の外、太陽や風が奨励されてきたが、それでも以前はまだ、原子力や化石燃料とのバランスは保たれていた。ところが、2011年の福島第一原発の事故でそれが完全に狂った。

事故当時、偶然、私は東京にいたが、その途端、ドイツから不思議なニュースが入り始めた。